

純情小曲集

## 目次

風に額を洗われて

なつかしさとやさしさと

(もしもいつか)

愛の話をしよう

木漏れ日

(哀しみは休符になり)

アート・ガーファンクル

手巻きの時計

赤レンガ

浜辺

涼やかな風

夕暮れのプラットフォームで、今も

ぼくには見える

風に額を洗われて

朝露に濡れた野道を

この一本の細い道を

君と手を取り歩いてゆく

なぜかたまたまなくゆかしくて

そしてたまらなくなつかしい

どこかでひばりの声もする

春の温かな風に額を洗われて

野原いちめんの

濃い緑のじゅうたんに

ぼくらは新しくなる

なつかしさとやさしさを

なつかしさとやさしさは  
時に同じ歌をくちずさむ  
アスファルトに

うつむくすみれのように

伏せたまつげ

陶器のような白い肌

つややかな黒い瞳

なつかしさとやさしさは  
時に同じ歌をくちずさむ  
アスファルトに

うつむくすみれのように

(もしもいつか)

もしもいつか

あなたの涙を渴かせるなら

この春の野に吹く

一陣の風になりたい

もしもいつか

あなたの喉を潤せるのなら

春のゆるむせせらぎの

一しずくの水になりたい

もしもいつか

あなたの心が冷えたなら

たった一つの魂をやさしく温める

一人の詩人でありたい

愛の話をしよう

愛の話をしよう

遠い汽笛に耳を澄ませるように

川べりの小さな土手

公園のけやき

茜の夕陽

愛の話をしよう

遠い汽笛に耳を澄ませるように

消え去ることのない

未来の記憶

時は月とともに満ちて

やさしい風にそよぐけれど

あの真実な思いに

後悔はない

愛の話をしよう

遠い汽笛に耳を澄ませるように

木漏れ日

よしんばほくが

あふれんばかりの財貨を

地位を名声を

手にしたとしても

それが何になる

あのとぎの白い道をたゆたう

みずたまの影に

あるいは夏の肌を透く

一陣の風に

あるいは新緑に陰る

あの木漏れ日に

決して追いつけはしないのだから



(哀しみは休符になり)

哀しみは休符になり

涸れ井戸には水の戻り

谷は山になり

くねる道はまっすぐになり

あの風の丘を吹きわたり

紺碧の池に舞い

鏡の水面にそうそうと

繊毛のようにふるえ

ひとひらの雪

やがて白い花びら

アート・ガーファンクル

高原をわたる

風に似た遠い声

かすかに湿り気を帯びて

ガラスの小麦の

澄み渡る響き

アート・ガーファンクル

あなたの優しさ

愛と哀しみの

今も魂にひたりくる

手巻きの時計

その白い小さな手で

錆びた時計のねじを巻いてください

針は動きを止め

納屋に置かれたままの

固いブリキのねじを巻いてください

その白い小さな手で

錆びた時計のねじを巻いてください

化石した自我に温もりの戻り

茜色の時間の動き出す

固いブリキのねじを巻いてください

その白い小さな手で

錆びた時計のねじを巻いてください

ライアーを弾くように

草地で額に手をかざすように

固いブリキのねじを巻いてください

赤レンガ

逝く夏の陽光の

虹色のガラスに射し

真紅のウイスキーと

埃っぽい空気

煙草の匂い

水色と白のワンピース

まっ白な靴

赤いリボン

細い指

まだらの海の底

逝く夏の最後の光

茜なす遠い面影

浜辺

名もなき石

貝殻、ガラス

浜辺に寄せる波

あの見果てぬ水平線から

丸く磨かれ

海草にからまれて

うすい影を宿し

不思議なまでに浄化され

あの頃的情炎も

ゆくりなき海流に

ひやされて

手にとれるまでに

浜辺に寄せる波

あの見果てぬ水平線から

涼やかな風

灼熱の苦しい一日も

夕べの野をわたる涼やかな風が

だきしめてくれる

慰めてくれる

心を

ぼくたちの心を

下りてくる

蒼い大気が

大地をつつむ

丘の上から

なよぶ草を透いて



大きな夕陽が落ちていく

灼熱の苦しい一日も

夕べの野をわたる涼やかな風が  
だきしめてくれる

慰めてくれる

心を

ぼくたちの心を

夕暮れのプラットフォームで、今も

夕暮れのプラットフォームで、今も

君がさようならと両の手を振る

関東平野の土埃の匂い

やわらかな風

黒い切り絵の山並み

駅舎の瓦は代赭色

うすく汗をかいて

夕暮れのプラットフォームで、今も

君がさようならと両の手を振る

ぼくには見える

ぼくには見える

蛇口のしずく

水気を含む風

尖ったとたんの塀

教室の隅の長い影

ため息と頬をつたう涙

ぼくには見える

失われた声

愛を求め

死にたいくらい

求めてやまぬ

愛の道標

大平のひとひらの雲  
ぶどう園から  
ため池への野道